

## 大津と町田久成、ビゲロー、そしてフェノロサ



(筆者撮影)

1995年11月初め、滋賀県大津市にある天台宗の名刹、園城寺の一角にある法明院を訪ねた。晩秋とは思えない、暖かな好天に恵まれたある日のことである。法明院は1872年の日本最初の近代的図書館「書籍館」と「博物館」設立の功労者、町田久成が眠る場所である。

通称三井寺の名で知られる園城寺から法明院は相当離れた位置にある。これは明治初年広大な寺域の相当部分が軍用地になり（3万1,800坪、国会敷地の約2倍）、大坂鎮台陸軍歩兵第九連隊の兵舎（現大津商業高校）と練兵場（現皇子山総合運動公園）になったことによる。この地を訪ねたのは1992年7月以来3年ぶりのことで、その時は明治初期の日本外交史の専門家、犬塚孝明氏（鹿兒島純心女子大学教授）と一緒にであった。

場所は毎年3月に毎日新聞社が主催す

る琵琶湖マラソンで有名な、前述の皇子山競技場の裏手、ユースホステルの奥にひっそりとある。静かに湖を見下す法明院の裏手にある古池をさらに進み右に登って行くと、桜井敬徳住職（当時）の銅像と墓がある。隣接してフェノロサ、ビゲロー、町田の墓もある。いずれも敬徳受戒の弟子である（先の米国人2人は1885年9月、町田は1873年4月）。

フェノロサ（1853-1908）は日本美術の紹介者として周知の人物であるが、1908年9月ロンドンで客死、一旦その地に埋葬されたが、遺言により1年後には遺灰移送となり、現在ここに眠ることになる。

一方のビゲローは前者ほど一般には知られていないが、ボストンで祖父の代から医を業とする名家の出である。大森貝塚の発見者として有名なモース（Edward S. Morse, 1838-1925）、フェノロサと共

に1882年横浜に着き、以来7年間日本に滞在する。その間、社寺等の古美術保存、鑑画会を通じて狩野芳崖、橋本雅邦等を経済的に支援、伝統的な日本絵画の保護育成を助けた。帰国後も岡倉天心の要請に応じて、日本美術院設立(1898)に際し巨額な資金援助をするなど、明治の近代美術発展に大きく貢献した。

兄弟・家族のいない彼は莫大な財産を継承し、フェノロサの後楯として、また直接前述の桜井師の宗教活動を財政面で支援したようである。来日時彼の活動はフェノロサの影に隠れてあまり知られていないが、彼の存在はもっと評価されてよいであろう。また、日露戦争前後の時期、友人であるルーズベルト大統領や、ジョン・ヘイ国務長官に対する親日家としての彼の日米友好関係への貢献は見逃すことはできない。その功績で勲三等旭日中綬章をパリで栗野駐仏大使から受け、これに対し小村外務大臣宛に礼状を1910年3月11日付で送っている。金子堅太郎を含めて彼らがハーバード大学の同窓生であり、互いに意思の疎通が図り易かったことも一助となったようである。ここで墓参の際記録したビゲロの墓碑銘を紹介する。

Here and in his native land, America, lie the ashes of William Sturgis Bigelow, a follower of the Buddha, known in religion as Gesshin Koji (訳注：月心居士 以下同じ), a pupil of Sakurai Ajari (桜井敬徳阿闍梨), a supporter of Hōmyō-in (法明院), a Doctor of Medicine, a lover and collector of the fine arts of Japan, a recipient of the order of the Rising Sun (旭日章). His life was distinguished by high thoughts

and good deeds, by understanding and by the gift of sympathy. He was everywhere beloved and honored most by those who knew him best.

April 4th, 1850 - October 6th, 1926

ところで、ウィリアム・ビゲローの祖父がジェイコブ・ビゲロー (Jacob Bigelow, 1787.2-1879.1 典拠: Dictionary of American biography., v. 2) で、応用科学の意味で「テクノロジー」の語を初用した人として有名である。1829年, "Elements of Technology" を刊行、さらに1840年にはこれを発展させた "The useful arts" (2冊) を出版、これも話題を呼んだらしく, "National union catalog, pre-1956 imprints" によると、1842年以降に6度も版を重ねている。そして1847年には、米国芸術・科学アカデミー総裁に就任、以後1863年までその任にあった。父のヘンリー・ジェイコブ・ビゲロー (Henry Jacob Bigelow, 1818.3-1890.10 典拠: 同上) はボストンの著名な外科医で、米国で初めて股関節手術を行うなど整形外科の面で大きな貢献をした。因に、当館ではウィリアム・ビゲローの著作として次の2点を所蔵する。

Buddhism and immortality. Boston & New York, Houghton Mifflin Co., 1908. 76p. (The Ingersoll lecture. 1908)

<請求記号 190-97>

Selected letters of Dr. William Sturgis Bigelow, edited by Akiko Murakata [村形明子]. (n.p. 1971) 557ℓ. Thesis--George Washington University. マイクロフィルムからの紙焼き

<請求記号 GK417-89>

最後に町田久成(通称民部、号は石谷、1838-97)についてであるが、町田氏は薩

摩藩の名族で同国日置郡石谷領主。1865年畠山義成、鯨島尚信、森有礼等と共に薩摩藩英国留学生の一人として渡英。帰国後は文部省・内務省等で主として書籍館、博物館の設立に努めた。とくに英国をモデルとした殖産興業の観点に立つ大博物館構想は、紆余曲折を経て文部省下の現在の姿になった。彼の事績については重野安繹の手になる東京国立博物館「町田石谷君碑」(『東京国立博物館百年史』(1973) p.227-29に収録)に詳しい。元老院議官の時、師の桜井敬徳が没するに及び出家、仏門に入る(1889.12)。1897年9月上野山内の明王院に没し、大津の桜井敬徳師の傍らに葬られる。奇しくもその年6月に古社寺保存法が制定されたが、これは奈良、京都等の古美術の保存に尽力し、またその鑑識眼でも知られた彼にとってなによりの饒となつたろう。さらに錦上に花を添えたのは、同年4月に当館の源流である東京図書館が帝国図書館に発展し、5月には帝国京都博物館が開館したことである。先に紹介したビゲローは1902年にもう一度来日するが、その際古社寺保存法による古美術の保存政策の進展を喜んだ由である。

## 参考文献

- 久富 貢 『アーネスト・フランシス・フェノロサ 東洋美術との出会い』 中央公論美術出版 1980.10 287p.
- 山口静一 『フェノロサ 日本文化の宣揚に捧げた一生』 三省堂 1982.4 2冊
- 村形明子編訳 『アーネスト・F・フェノロサ資料 1-3』 ミュージアム出版 1982.11-87.2 3冊
- 『アーネスト・F・フェノロサ資料 月報』 No.1(1982.11)-3(1987.2)
- 村形明子 「日本美術の恩人 ビゲロー略伝」『古美術』 35(1971.12) p.57-69
- 小松原濤 「フェノロサとビゲロー」『読書春秋』 4(11) 1953, p.12-13
- 神田孝夫 「石谷・町田久成をめぐって」『Lotus』(日本フェノロサ学会機関誌) No.8(1988.3) p.26-55
- 瀧 悌三 『日本近代美術事件史』 東方出版(大阪) 1993.1 426, 21p.

(1996.1.8 中林隆明)